



研究目的

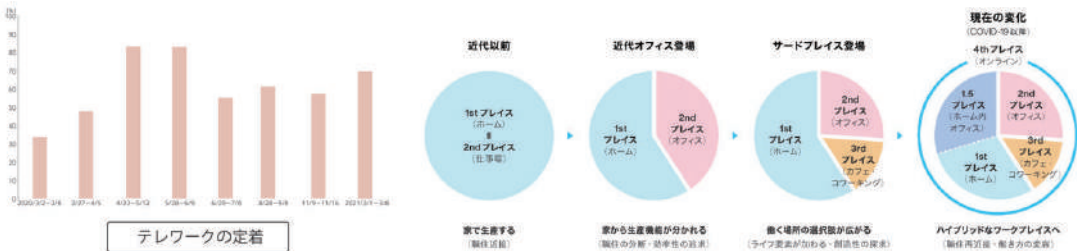
2019年12月から始まった新型コロナウイルスの世界的流行はまだまだ収まらず、次々と変異株が生まれ、感染は拡大している。その一方で世界は新型コロナウイルスを従来のインフルエンザウイルスと同等の扱いとし、社会的制限を減らし始めている。すなわち、「withコロナ」「afterコロナ」へと世界が動き始めたといえるだろう。

この「withコロナ」「afterコロナ」の時代におけるリカレント教育の需要の高まりと、それに対応した大学のあり方を考える必要がある、これまでのキャンパスにはない新たなリカレント教育と大学の関係性に対応した建築空間の提案が必要であると考えられる。

本研究はこれからの大学に必要なリカレント教育、社会人学生に対してアプローチをした建築空間を提案することを目的とする。また、明星大学の今後の発展を考えた上で、明星大学の顔となるような建築空間を提案する。

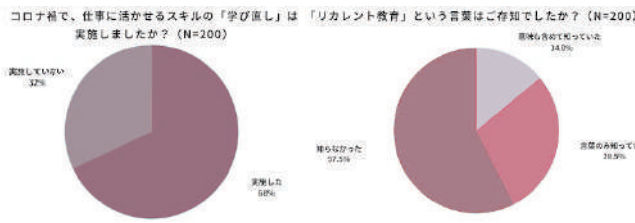
研究背景

背景1 テレワークの定着と新しい働き方



テレワークの実施状況によると民間企業のテレワークの実施状況は新型コロナウイルスの感染拡大によって急速に進んだ。2020年3月時点では17.6%だった実施率は5月の際には56.4%まで実施率が伸びている。その後緊急事態宣言の解除後に低下するが30%前後の企業は実施しており、一点の定着が図られていることがわかる。また、働き方が大きく変化し、これまでのような空間をはっきり分けた働き方から、オンラインによってどこでも繋がるハイブリッドなワークプレイスへと変化した。大学も一つのワークプレイスの可能性を残すのではないだろうか。

背景2 学び直し需要の増加



コロナ禍によって「学び直し」の需要が増えた。ある調査ではコロナ禍の中で実施した人の割合は70%近くになっている。一方で「リカレント教育」という言葉の認知度は約40%にとどまっていることがわかる。2022年流行語対象のノミネート語の中に「リスキリング」が入るなど、その認知度は少しづつ上がってきている。「リカレント教育」や「リスキリング」はこれからの変化の早い時代に必要不可欠なものであり、より一層の認知と定着が必要である。

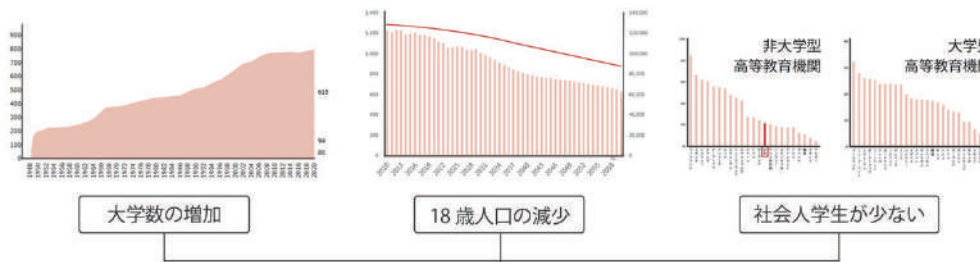
「新語・流行語大賞」2022 ノミネート語30発表 (50音順)

1 イロチビザン	11 団員賞	21 スンダ
2 インボイス制度	12 こども事業庁	22 BIGBOSS
3 大粒ルール	13 遊戯2世	23 特捜隊
4 オーディオブック	14 菊5人ぼ	24 メタバース
5 099 (ゼロ九九)	15 SPYxFAMILY	25 ヤー1/バワー1
6 オミクロン株	16 スマホショルダー	26 ヤカルト1000
7 藤井ツツ	17 青春って、すごく恋なので	27 リスキリング
8 ガ手中華	18 #ちねだん底面会	28 ルッキズム
9 キーウ	19 丁寧な説明	29 令和の権威
10 きつねダンス	20 てまえどっ	30 悪い内定

調査・分析

調査・分析1 大学の今後と可能性

大学数の増加に対して18歳の人口は減少傾向にあり、「大学全入時代」と呼ばれる時代に突入している。
 大学によっては定員割れが発生し、大学の存続問題になる。また、OECDの加盟国の中でも日本は社会人学生数が少ないことがわかっている。
 これらより、今後大学を存続させるためにも社会人学生をどのように増やし、受け入れていくのかということが重要である。学び直しの専攻分野の上位の科目のほとんどは明星大学で学ぶことができる科目である。明星大学は総合大学であるため、1つのキャンパス内で様々な分野を学べるという点で学び直しに適した大学であると言える。



▼「学んでいる/いた」専攻分野を教えてください▼

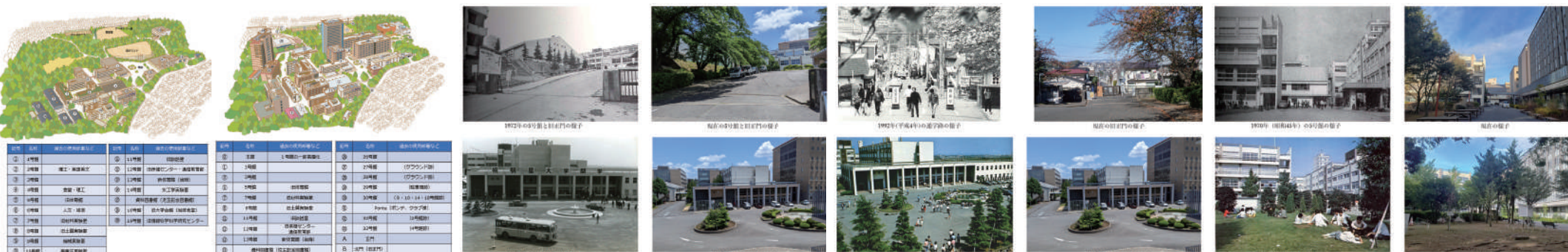


調査・分析2 明星大学の基本概要

明星大学は9学部12学科1学環、大学院は6研究科、また通信教育部を持つ総合大学である。
 日野キャンパスと青梅キャンパスの2つのキャンパスを持つ。
 現在は日野キャンパスにすべての教育施設が集約されており、多摩丘陵の自然を多く残す
 約24万㎡の敷地に約9000人の全学生が集まる。
 2023年に明星学苑が100周年を迎える。これを機に学苑全体で新たな100年に向けた動きが始まっている。本計画はこの100周年以降の明星大学のキャンパス計画への一つの提案である。



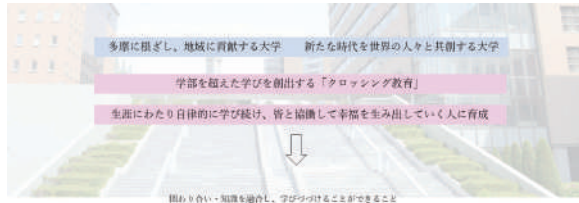
調査・分析3 明星大学の変化と歴史



明星大学は1964年に開学して以降大きく変化してきた。
 開学当初の様子と現在の様子を見比べ、大学の変化を分析した昔のキャンパスの学生の集いの場に現在は学生が集まっていないという変化が見えてきた。
 明星大学は2000年の多摩モノレールが開通して以降大きくキャンパスが変化した。2000年に向けて1994年から多くの建物が竣工し、大学が大きく変化してきた。
 これによって、明星大学の美しいキャンパスが生まれた。

設計概要

設計コンセプト



- 大学職員・教員
- 学生
- 地域住民・OBOG
- 社会人学生



クロスのその先にある無限の可能性へ
INFIATE

- 大学へのメリット
 - ・ 社会人学生が増えることで、大学としての存在意義が高まる
 - ・ 企業との繋がりが生まれる
 - ・ 地域交流の場所として使うことで、地域貢献可能
- 一般学生へのメリット
 - ・ 企業との交流が生まれ、就活などに役に立つ
 - ・ 普段あまり接点のない社会人との交流によって、視座が高まる
- 地域へのメリット
 - ・ 地域交流のイベントなどで利用しやすい
 - ・ 学生や企業との接点を作れる
- 企業へのメリット
 - ・ 学びなおしを推進でき、仕事を学び直しの両立がしやすくなる
 - ・ 教授との接点ができ、企業活動上の創造性が高まる
 - ・ 優秀な学生を見つけることができる

ビジョン

教育目標

大学の顔としての建築を生み出すために、大学のビジョンや教育目標を元に考えた。そこで、「クロッシング教育」を通した「困り合い」・「知識の融合」・「学び続けること」が重要な要素であると考えた。

「大学での学び」も「学び直し」も「仕事」もできる「クロスのその先にある無限の可能性を生み出す建築」をコンセプトに、大学職員・学生・地域住民・社会人学生の4者がクロスし、全ての人に価値を提供することで、大学の顔となる建築を目指す。

マスターデザインの決定



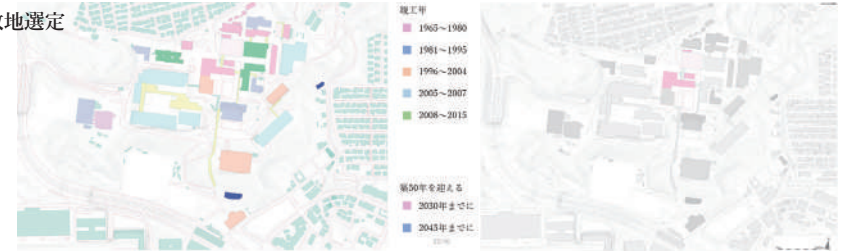
既存のデザインコードを元に明星大学のマスターデザインとして3つのデザインを選定した。

本設計では大学の歴史を見ていく中で、既存のキャンパスに存在している大学の広場に新たに着目した。

現状キャンパスにはソルブラン・アンソレイユ・本館中庭の3つの広場が存在している。

そこで大学内の広場になり得る空間を選定し結ぶようにしてキャンパス全体で広場の連続による軸を設定した。

竣工年別色分けと敷地選定



明星大学の建物の竣工年別に色分けを行った。その後2030年、2045年に築50年を超える建物のみを抽出した。

2000年のモノレール開通によって大学のメインエントランスが変わったため、大学北側に古い建物が残っていることがわかる。

そこで、竣工から50年を経過する建物を抽出し、設計対象とする建物を考えた。大学の顔となる建築を設計することが目的であるため、大学中心部をメインと対象と考え、2023年以降に取り壊しが決まっている5号館と1号館を選定することとした。(右の色付き部分)

選定敷地に対する広場の検討



既存の緑地と建物の関係を見直し、新たな広場について検討を行った。

既存の1号館と噴水広場はOB/OGの思い出の場所となっていることがFacebookなどの卒業生の言葉から分かっている。そのため、1号館と噴水の関係を維持することを決め広場案2と広場案3とした。

続いて選定した敷地の周囲の流れを検証した。学内への車の動線や学生の流れ、地域住民の流れが交差する場所の中心にあたる。そのため車の動線と広場を分離することを考え「広場案3」を採用した。



造形の流れ

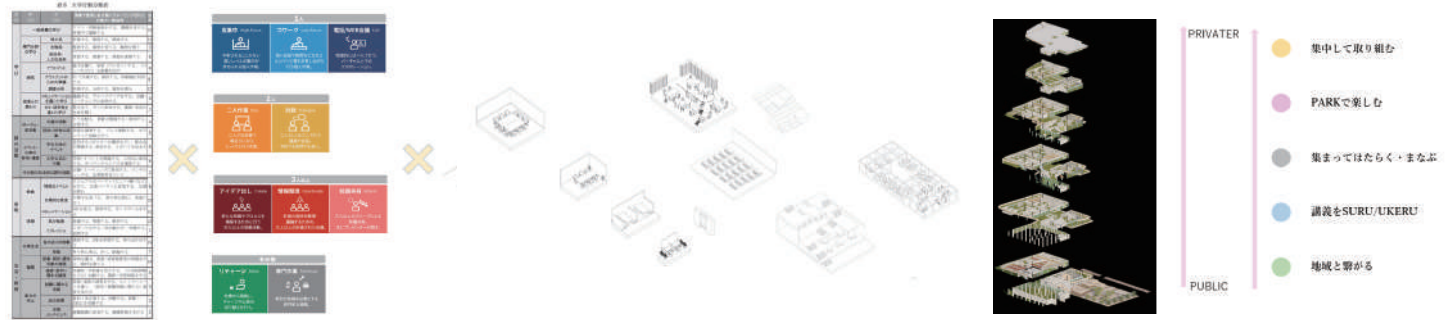


クロスのその先にある無限の可能性へ ～アフターコロナ時代の明星大学の姿～ 福島 勇希

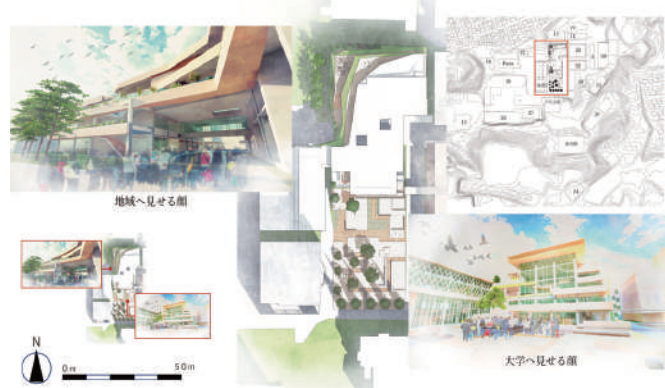
設計概要

空間の構成方法

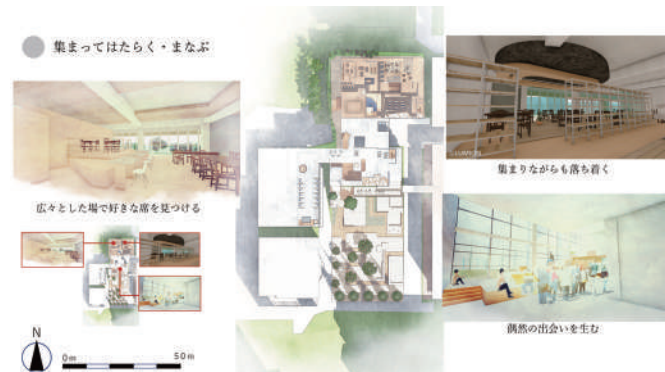
働き方の一つであるABWや学生の行動の分類調査を元として、空間単位を設ける。
それぞれの活動の大きさに合わせて小規模な空間から大規模な空間を設計していく。
これらを1Fから5Fごとにテーマを設けてそれらに対応した空間を配置していく。1階は地域との交流を含めたパブリックな空間とし、最上階を最もプライベートな空間としてグラデーションになるように設計していく。



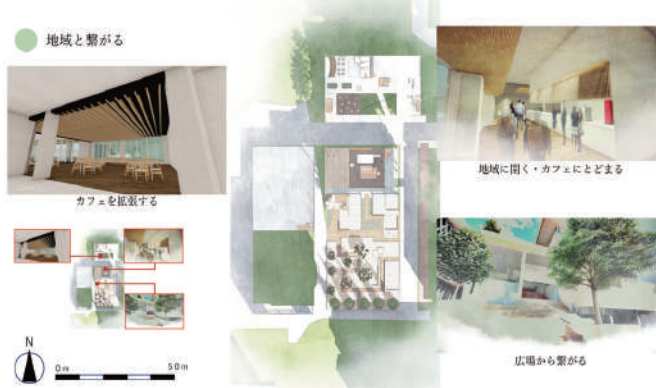
各階の平面図とパース



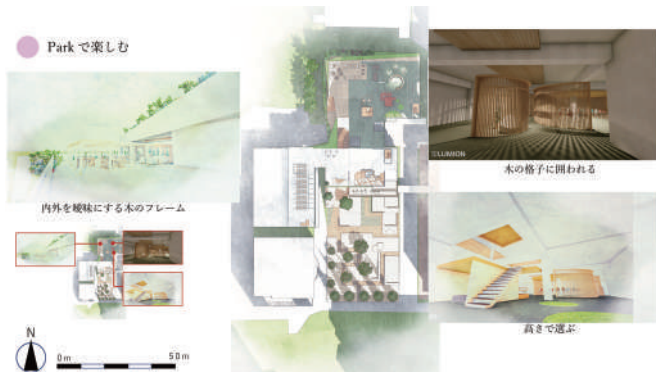
本設計は大学の顔となる建築を目指したものである。
そこで、
学生向けの「大学の顔」地域向けの「大学の顔」という2つの顔を持つ建築とした。



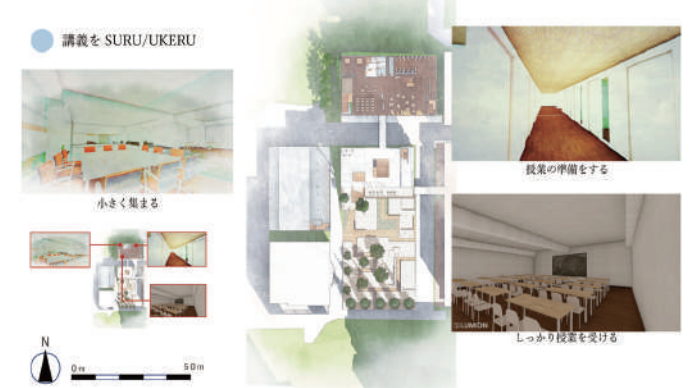
3階部分は人々が集まって作業する大きなリビングをイメージして設計を行った。
広々と開放的な空間の中に、4人席や2人席、カウンター形式の1人席などを配置し、
目的や人数に合わせて場所を選べるようにした。明るく楽しくワイワイと作業などが
できるイメージの空間を目指した。



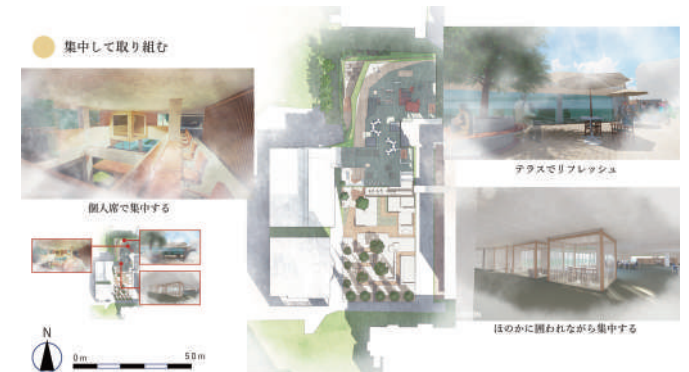
1階部分は地域と大学の結節点としての役割を果たす。
偶発的な出会いの連続をテーマに学生たちの活動と地域の活動が繋がる場所を目指している。
地域側にはカフェを設計し、地域住人が留まりやすい場所とする。学生と地域住民の結節点となると共に、現在はあまり人が集まっていない場所に人を集まる仕掛けとする。



4階部分はオープンで開放的は楽しい空間をイメージして設計した。内外の境界線を曖昧にし、大きな公園のような楽しさのある空間を目指す。木のフレームが室内から屋外のテラスまで連続的につながっていることで、内外の境界線を曖昧にし、どこまでも広がるワークプレイスを目指した。



2階部分は講義のフロアとしての役割のフロアとした。
コロナによってオンライン授業が可能となっているため、大人数の授業はオンラインで行いやすい。そのため、社会人用の授業教室という点も踏まえて、60人程度の中規模の教室を設計した。また、特別教員室を用意した。



5階部分は社会人学生が集中して仕事などをすることを想定し、設計を行った。
集中して作業を行えるようにカウンター席や個室を多く用意している。また、通路を作業スペースをしっかりと分けることで、他のフロアのような自由さよりも硬い空間となっている。